

子どもたち一人ひとりの国語の力を伸ばすには、どんな授業を考えればいいのでしょうか。  
ここでのヒントをもとに、明日からの授業にチャレンジしてください。

さあチャレンジ！

子どもを伸ばす国語授業のヒント(最終回)

## 次の授業に生かす 学習の技術と心

前青山学院大学講師 岩崎保

毎日の学習は、昨日の続きが今日であり、今日の続きが明日の楽しみになっていくものです。次の授業に新しい課題をもち、期待を膨らませている児童がそこにいることが、教師の願いだと思えます。そうした授業を続ける学習習慣の技術と心身に付けさせていくことが、教師の知恵と工夫なのです。

そのためには、教材をシャープにとらえた具体性のある言葉で、毎時間の学習課題を提示することが大切です。そして、学習の結論を児童が納得できる内容にまとめて次の授業の学習課題を設定し、児童と確認し合うことです。学習を展開する中で、発言や聞き方の約束を作ることにも有効です。

こうした学習法の習慣化が、児童の自主性や自立性、学習意欲を高めることは間違いありません。

模造紙一枚くらいの大きさにしたいです。わたしの劇の発表にしたいですか。

- ◎なるほどね。みんな、どう思いますか。
- c すごくいいと思います。僕も手伝えたいです。
- c こういうグループを作ったらいいいと思います。
- c 賛成です。(全賛)

- c おじいさんが転んだときに、驚いて騒ぐ村人はどうかな。
- c わたしもせりふを言いたいし、何回言えるか楽しみです。
- c 今思ったんだけど、おじいさんが自分で転がる場所でも、応援の子どもや村人がいてもいいよね。

◎よく分かりました。工夫がどんどん出てきましたね。みんなが劇を楽しみにしていることも、よく分かりました。グループでも、いろいろな工夫ができますよ。では、次の時間から、登場人物を増やす場面と増やしたいせりふを考えながら、読み進めましょう。

2 第2次5時間目の場面——想像する楽しさを表現する姿  
うれしがってとうげを転がるおじいさんの様子と、歌を歌ってはげますトルトリの様子を劇に生かそうと工夫する授業です。

- ◎おじいさんは、トルトリが考えた話を信じていますか。
- c 初めは、「ばかな。わしに、もっと早く死ねと言うのか。」と怒っていました。
- c でもね、よく考えたら、「うん、なるほど、なるほど。」と言って、だんだん分かってくる、信じてきました。
- c よく分かったら、もうじつとしていられなくて、ふとんからはね起きて、「三年とうげ」に上っていききました。
- c そして、わざとひっくりかえり、何回も転びました。おじいさんの気持ちが変わって、病気が治りそうです。

— 今日、何が学習したのか、児童一人ひとりがとらえられるように——『三年とうげ』(三上)

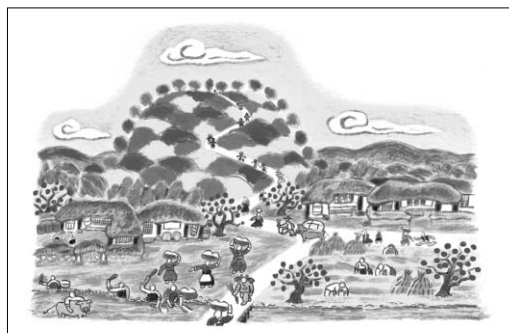
1 第1次3時間目の場面——単元目標の内容を考え、自分の願いを求める姿

ここでは、「台本を作って劇をしよう」という単元を設定し、学習の展開の一コマとして、学級の全員が出演することを願って、台本を作ることにしました。台本作りの計画を立てる学習の中で、おおよその場面分けをしてグループで分担することにしました。第1次最後の学習目標は、「みんなが劇をするにはどんな工夫をしたらよいですか。」としました。

(◎は発問、cは児童の考え)

◎台本作りで工夫したいことを発表してください。

- c 必ず一人ひとりに、せりふを言えるようにしたいです。
- c 賛成。だから、登場人物を増やしたいです。たとえば、美しい「三年とうげ」をおじいさんが眺めるところで、村人何人かに、言い伝えのうわさをしながら歩かせるのもいいと思います。
- c なるほど、いいな。だったら、ナレーターも場面ごとに交代してもいいね。
- c 秋のとうげの美しさを想像して、劇の背景にしたいです。わたしは色や形や種類などを考えます。



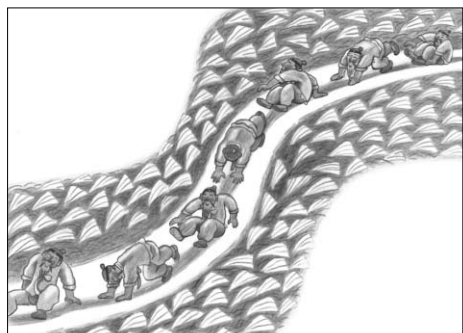
▲三上 P54・55の挿絵(朴民宜/絵)

◎そうでしたね。そこで、今日のこの時間では何を考えればいいのですか。学習のめあてを確かめましょう。

- c 「ぬるでの木のかげから歌を歌ったのは、いったいだれなのか。何のために歌ったのか。」を考えて、せりふも作ります。

◎(めあてを板書し、全員で音読)では先に、だれが歌っているのですか。

- c 名前は書いてなくても、歌ったのはもちろんトルトリだよ。だって、おじいさんが病気になるのを知っているのは、トルトリとおばあさんなんだから。わざわざこわい言い伝えのあるとうげに行くとは、村の人たちは思わないよね。
- c そう思います。おじいさんは、トルトリの言葉で考え直して勇気が出たんだから、一人で一生懸命転がります。
- c おじいさんが言う言葉なんだけど、「ようし、転がるぞ。何回も転がって長生きするんじや。」というのはどうですか。



▲三上 P60・61の挿絵(朴民宜/絵)

◎なるほど。歌ったのはトルトリでいいですね。では、どうして歌ったのですか。

- c おじいさんにもっと勇気をもたせようとしたのです。
- c トルトリが教えた歌が聞こえれば、トルトリの話は本当だったんだと、もっと勇気が出ます。



- c だから、先回りして歌ったんだと思うな。そして、「このときです。」のところがナレーターが言うてから、歌えはいいと思うよ。
  - c わたしたちのグループは、「楽しくなるように調子よく歌う」とト書きに書きました。
  - c だったら、トリトルは友達を連れてきて、合唱したらどうですか。そして、小さい声で「おじいさん、がんばれ。」って応援してもいいと思います。
  - c 木のかげでトルトリが、「ああよかった。おじいさんが本当に転がった。」とつぶやくようにします。
  - c ほくたちは、「何回も歌を歌う」と書きました。
  - c 歌うところで「手拍子をつけながら歌う」とト書きに書きました。
  - c 最後のおじいさんは、けろけろけろっとしたポーズをみんなでも考えました。B君がいちばんうまくかったです。
- ◎想像力を働かせて、楽しく工夫できましょね。昔話ですから、歌を歌った人の名前をなぞかけのように読む人の想像に任せているんですね。では、明日からは、グループごとに計画して、練習することにしましょ。

この単元で台本作りをする際、教師の準備として、まず全文をプリントし、そのまま使える文章は色画用紙に切り貼りし、せりふの付け足しやト書きなどは罫紙に書いて、行間に貼るようにはしました。

その後の学習では、書き加えや書き直しをしてから音読練習したり、切り貼りして作った台本で、役割を決めて音読を始めたりました。今何をしたいか、何をすればよいかを自主的にグループで判断し、計画して活動できました。学習発表会は、

えたりしてはげますぞ。

- ・間違えていても、揚げ足取りやブーイングはしないぞ。
- ・新しい意見やすてきな発見には、拍手の応援をするぞ。
- ・人の話を聞いて理解できる人は、賢いことを知るぞ。

## 2 教師の言葉と行動、そして心配りで活性化を

児童にそれを求めるだけでなく、教師は、学級一の「聞き取り名人」にならなければなりません。もちろん、間違った発言も学習の中で生かしていくのです。間違えた理由を友達と考えさせ、正解を理解させてから、「あなたが間違えたおかげで、みんなもよく分かりよい勉強ができました。」と励ますことができます。

教師が何気なく使う言葉の中に、児童を生かしたりつぶしたりしているものがあります。それが、発言しない原因を作っていることも少なくありません。授業を進め急ぐため、教師の考えを押し付けたり、発言を切り捨てたりしていないでしょうか。注意してほしい例を示します。

- ・(発言の直後に) だれか、ほかのいいいませんか。〔無視〕
- ・前の子に比べていい意見だったね。〔前者否定〕
- ・そんなこと聞いてないだろう。よく考えろ。〔断定〕
- ・その考えは、ここが違うんだよ。分からないか。
- ・分かる人は手を挙げて。なんだ、これだけか。

### 〔欠陥指摘〕

### 〔発言の固定化〕

これでは発言しなくなつて当たり前です。どんな発言でも温かく迎え、耳を傾けてうなずき聞いてやる「時間と心のゆとり」が必要なのです。もし児童に元気がなく、顔が下を向いて発言が少なかったり、誤答が多いと感じたときは、

全員が大満足の様子でした。

## 二 毎日の学習で、活発に発言させる工夫と習慣化のために

国語の授業の中で、児童の「発言」は、教師の発問に対する「応答」だけでなく、「児童相互の意見交換や質疑応答」でも重要なものになります。児童は、発言によって自分の考えをまとめたり、理解を深めたりしています。また、友達の発言を「聞くこと」によって、自分が気づかなかった事柄に気づくことも多いはず。発言が活発になればなるほど、理解し思考する活動も盛んになるのです。

### 1 話しやすく発言しやすい学級経営の日常化に向かって

児童が発言しない理由の多くは、「間違えると恥ずかしい」「自信がない」ということにあります。ですから、たとえ間違つても笑つたり非難したりせず、一人の発言が尊重される「心のケア」が求められます。これは、教師と児童のコミュニケーションと信頼の上に成立する学級経営の基本であり、教育の第一歩ととらえるべきです。

「聞き上手」の約束を児童と話し合つて決めておき、それを習慣化して、聞く力に自信をつけ、話す力の自信に変容させるのもその方策です。その一例を示します。

### 「聞き取り名人になろう」

- ・友達の発言は、目を見ながら、最後まできちんと聞くぞ。
- ・共感したり、賛成したりしたいときは、うなずきながら聞くぞ。
- ・声が小さかったら、もっと静かにして聞くぞ。
- ・自信がなさそうな友達には、付け足したり、いっしょに考

- ・発問に誤りや欠陥がないか。
- ・学年や学級の実態に合った言葉を使っているか。
- ・発問内容が児童の思考に合っているか。
- ・発問した後、考える時間を与えているか。
- ・発言者が偏っていないか。
- ・よい発言や答えをほめてやっているか。
- ・児童と教師が信頼し合っているか。
- ・自らに問いかけ、反省し修正できる教師が必要なのです。そして、直ちに発問のしかた、内容を修正して、「ごめんなさい。もう一度問題を出し直します。」と言える、児童の心情を敏感に理解できる教師でありたいものです。
- 教師と児童の心が信頼でつながった学び合いこそ、授業を活性化させる源です。児童の発言意欲が高まり、目を輝かせた明るい笑顔が広がる学級が、そこにあると思います。

最後に、児童の発言を促す発問の工夫を挙げておきます。明日からの授業の参考にしてください。

- ・どこが自分の意見と同じか。
- ・この話で、説明が不十分なのはどこか。
- ・友達の発言を比べて、どれに賛成するか。
- ・どんなところが自分の考えと違うか。
- ・この意見をもっと分かりやすいものにできるか。
- ・先生や友達に、確かめたり質問したりすることはないか。
- ・これまでの意見をまとめることができるか。

これらは、一問一答の授業にならないための工夫、集団思考に向かうための工夫ともいえます。児童一人ひとりが深く考え、視野を広げ、納得して友達を思い、教師を見つめる学級作りを目ざしたいものです。